

新収資料紹介

①大坂菓子食物他商標広告貼込帖

高麗橋の御菓子所に新町のカステイラ、大田南畝や馬琴も住吉さんへの道中で眼にしたごろごろやの煎餅。このような商標や広告が丁寧に切り取られて貼り込まれている。本資料は641点に及ぶ商標を貼り付けたスクラップブックである。資料の作成年代は、広告の年代表記や店の創業年から考えて明治期のものであろう。収集された商標の多くは食品関係だが、日用品や文具に交じり、空気ランプ、消火器、舶来製ピストル銃といった当時の目新しい製品、さらに天保山海水温泉場の開業広告といった目を引く資料も見られる。

数多く収集されている菓子店の商標は、商品が入った箱や包装紙に添えられていたと思われる。鶴屋八幡(高麗橋)^(註1)、菊寿堂(南久太郎町)^(註2)、廣井堂(新町)^(註3)、今里屋久兵衛の「あん焼」^(註4)(十三)など、現在でも商売を続ける店舗の商標も見られるが、このような商標は店舗側には残されておらず、店舗にとっても貴重な資料であることが聞き取り調査からわかった。

本資料の情報は表に示した。各帖の表紙には墨流しの紙に「寶故帖」と書かれた同寸法の題簽が付けられている。地域は「船場ノ部」、天満地域を含んだ「大川ヨリ北ノ部」、堀江地域を含む「川西ノ部」、難波村・木津村・住吉街道と近在の村、「和泉国一円」、「河内国一円」に区分されている。

帖番号	①	②	③	④
表紙	薄茶地赤刷毛目	薄茶地赤刷毛目	薄茶地赤刷毛目	黒紗綾形地紋
寸法 (縦×横)	22.8×16.8(cm)	25.2×18.2(cm)	25.1×18.2(cm)	24.5×18.1(cm)
内題 ()内は商標の点数	船場の部 (205)	大川より北の部 (104)	川西の部 (167)	内題なし (83) ^{註1} 西成郡難波村一円 (16) 西成郡木津村 (2) 住吉街道并近村 (25) ^{註2}
内表紙記載番号	5	7	8	10

注1 帖番号②の川西の部に続く地域に該当する。靱・土佐堀・京町堀の店舗の商標

注2 近村=今宮村・天下茶屋・住吉新家・桑津村・平野郷・富田庄・十三・伊丹・尼崎・西ノ宮・灘・御影・神戸・兵庫等迄

表のうち③の帖末に伊丹・尼崎以西の西摂地域の商標が含まれていない点や、それぞれの内表紙に5、7、8、10と連続しない番号が記されている点から考えて、これら4帖は全10帖前後のうちの数帖にあたると思われる。島之内や上町、東成郡の資料が見当たらないことから、全帖がそろっていないことは明らかであるが、本資料は明治期の大阪に展開した商業文化の一端を明らかにする資料であり、さらに現存が少ない木版刷りの商標が収集されていることから、印刷文化を知るためにも貴重な資料であると言える。



註

(註1) 現在、本店は中央区今橋。

(註2) 現在では中央区高麗橋に店舗を移している。

(註3) 明治10年創業。

(註4) 現在の商品名は「十三焼」。渡し餡が入った焼き餅。

(非常勤研究員 内海寧子)

新収資料紹介

②「大坂魚料理切手貼込帖」 幕末～明治 縦39.7×横29.4 (cm)



心斎橋筋平野町北へ入 大和屋熊吉 生魚切手 (左)
北久宝寺町壱丁目 第一楼 生魚切手 (右)
肴屋喜兵衛 鯛切手 (下)

この資料は、幕末期～明治期に大坂(阪)の商人が発行した生魚切手類43点を収集したものである。大坂(阪)でこのような贈答切手が出回ったのは、18世紀中頃とされ、主に祝儀や不祝儀、返礼などに利用された。必要な時に商品を手に入れることができる利便性が人々に受け入れられたのである。

とくに、鮮度がいのちの生魚の贈答には、生魚切手は重宝された。この資料は、鯛・鰻など生魚の切手のほか、干物・蒲鉾・鰯などの加工品の切手、寿し・鰻飯などの料理切手(券)がみられるのが特徴である。近世後期以降、大坂(阪)では飲食店が発達していたため、料理切手の需要も大きかったのであろう。切手の中には、数量と代金が記載されているものもあり、当時の魚商品の値段が分かることから資料的価値が高いと言える。さらに、切手は幕末期以降、美術的な要素が加わるが、明治期と推定される切手には、趣向を凝らして図案されているものもあり、商品切手がより発達したことをうかがわせる。また、梅花・鯛・鶴・亀・千石船・瓢箪・恵比寿など縁起物の図柄が多いことから、主に祝儀品として贈られたのであろう。

大坂(阪)の都市経済の成熟を物語る好資料である。

(生活文化遺産研究プロジェクト研究員 森本幾子)

新収資料紹介

③西坊島村文書

平成20年11月、大阪の古書店から摂津国豊島郡西坊島村（現、大阪府箕面市坊島地区）にかかる古文書を購入した。内容は、近世後期～近代における村方文書である。同古文書の呼称については、地名をもとに「西坊島村文書」とした。以下、西坊島村と文書の概要を記す。

西坊島村について

摂津国豊島郡に属し、萱野郷十一ヶ村の一村。東坊島村の西にあり、萱野山の南斜面に広がる。集落は東坊島村集落と接する。近世初頭には坊ノ島村とよばれ、東坊島村とあわせて一村であったが、寛文5年（1665）の名寄帳（「池永家文書」、『箕面市史』史料編五に所収）に「東坊島村」とみられることから、この間に東と西に村切されたと思われる。村高は、享保20年（1735）の摂河泉石高調では244石余。用水は東坊島村と同じ溜池を利用したほか、千里川の柳井淵からも取水した。入会山は萱野郷立会の萱野山であったが、肥料や牛馬飼料に不足したようで、貞享元年（1684）頃には勝尾寺の山林の下刈を請け負っている。また、村内には浄土宗浄国寺がある。

支配については、文禄期、当村を含む萱野郷は薩摩の島津家や石田三成の知行地であった。元和初年の摂津一国高御改帳では幕府領（長谷川忠兵衛預）とある。摂津国高帳によると仙洞御領。天和3年（1683）頃の摂津国御料私領村高帳では幕府領のままだが、元禄7年（1694）以降は武蔵国忍藩阿部領となる。文政6年（1823）に御三卿の一橋領となり、幕末に至る。

西坊島村文書について

今回購入した西坊島村文書の総点数はいまだ明らかではないが、およそ数百点にのぼるとみられる。概要調査では、明和8年（1771）の史料「預り申銀子之事」から、昭和9年（1934）の「西組一心講勘定帳」までの期間の史料が確認できるが、その多くは文化文政期から明治期までの史料である。内容は、「村方勘定帳」や「年貢免割算用帳」のほか、「頼母子掛前覚帳」、「御触写覚」、「一橋殿御領知御高附并ニ村方共御高附帳」などが確認される。また、「御用金并永上納摂州五ッ組取調書上写」（文久3年）や「歩兵人足ニ付勘定帳」（慶応元年）など、幕末期に特徴的な史料もみられる。なお、史料の随所に「庄屋坂本林右衛門」、あるいは「副戸長阪本林右衛門」の名を確認できることから、同文書は西坊島村の庄屋の家に残された史料であると推察される。



西坊島村に関する史料については、箕面市地域史料目録集14・19『坊島地区共有文書目録』・『坊島水利組合文書目録』（箕面市、1986・1987年）が刊行されている（主に近代史料）。また、文政6年に西坊島村の領主となった一橋徳川家については、『一橋徳川家文書目録』（茨城県立歴史館、1989年）が刊行されており、これらの史料と絡めて調査・研究していくことが可能であろう。

（歴史資料遺産研究プロジェクトR.A. 松永友和）

新収資料紹介

④「浪花軍記」

【書誌】

〔書型〕 大本、二十八卷十冊。

〔法量〕 縦27.0×横19.0 (cm)。

〔表紙〕 茶色地。左肩に題簽「浪花軍記 一 (～十)」(墨書)を貼付。

〔目録〕 なし。

〔序跋〕 なし。

〔内題〕 「浪花軍記卷之一 (～卷之二十八)」。

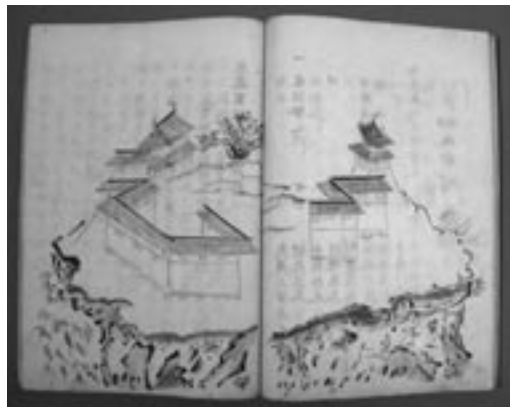
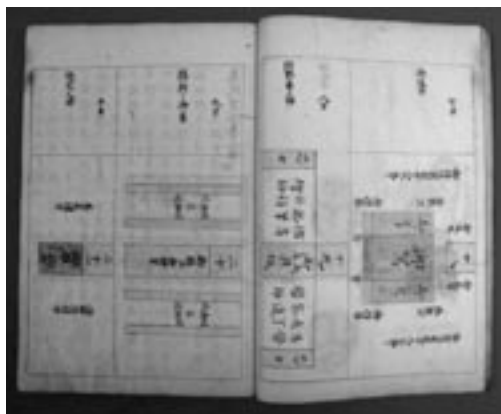
〔尾題〕 「浪花軍記卷之一 (～卷之二十八) 終」。

〔丁数〕 369丁。

〔その他〕 各冊に貸本屋印「越後 小栗山 鍵屋」が押印されている。

【解説】

豊臣秀頼が上洛して徳川家康に対面する条に始まり、大仏殿鐘銘の事件から大坂冬の陣の次第、一旦和睦して大坂夏の陣の次第、大坂落城・秀頼自害からその子国松丸召し捕り・誅戮までを描く難波戦記物軍記のひとつ。本書の特徴はその図にある。たとえば、巻四には「大坂籠城軍配事并図付砦」として大坂城に籠城する諸将を列記するが、その列記の途中にて「木村長門守重成」など多くの主要武将の旗差物・馬印を彩色画で記す。またその配軍図を彩色の絵図で示す。また巻五には「將軍家御進発御列位図」として、徳川秀忠の江戸からの進軍の陣容を図にする。その他にも、「大御所茶臼山御本陣図」・今福鳴野大戦の戦図・「真田丸車堀之図」など多くの図会が彩色で付されるところに特色がある。



(学芸遺産研究プロジェクト研究員 山本 卓)

新収資料紹介

⑤「内田稲葉画 菅楯彦旧宅周辺図」

【書誌】

〔形態〕紙本、彩色、軸装

〔法量〕縦 27.0 × 横 38.8 (cm)

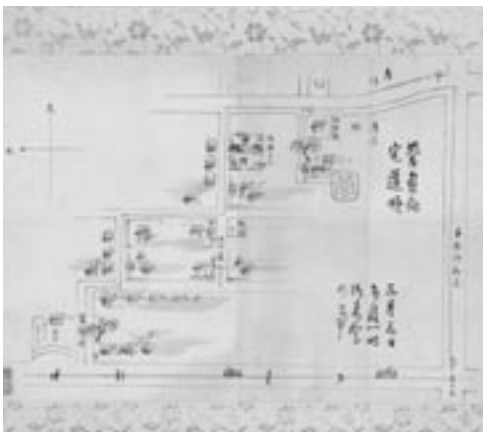
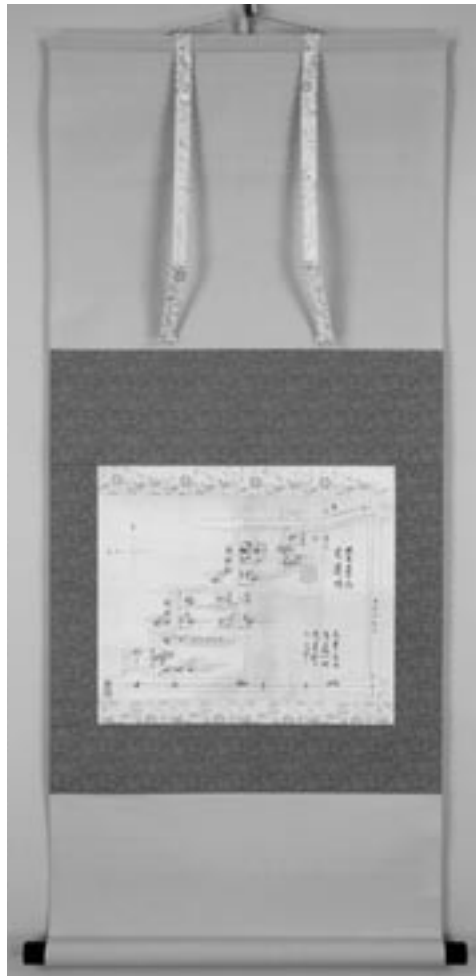
〔箱書〕「道しるべ」

〔箱裏〕「内田稲葉筆菅楯彦画伯旧宅繪図 昭和六十三年十一月吉日／竹泉題」

朱文方印「竹泉」

【解説】

内田稲葉^{うちだとうよう}が描いた菅楯彦^{いぐたかちようじよ}旧宅の周辺地図である。稲葉は鳥取県生まれ。生田花朝女^{いくたかちようじよ}らとともに楯彦に師事した。また、矢野 橋 村^{やのきようぞん}とも交流があった。昭和 58 年（1983）没、享年 83 歳。楯彦は大正 9 年（1920）より南区天王寺常盤通（現・阿倍野区松崎町）に住み、稲葉らも足繁く通っていたと思われる。本図右上に「菅画伯宅道順」とあるように、楯彦の旧宅への道順を赤色の線で示している。また、右下に「三月三日午後一時御来駕の事」とあるので、自宅で開催した雛祭りの案内だと考えられる。具体的には未詳だが、昭和 30 年代頃の阿倍野を描いたものか。なお、楯彦の旧宅には「菅」（朱文方印）と押印されている。



※参考『浪速の雅人 菅楯彦』（倉吉博物館、1997 年 7 月）

（学芸遺産研究プロジェクト R.A. 中尾和昇）

新収資料紹介

⑥「菅楯彦筆 万葉和歌掛幅」

【書誌】

〔形態〕紙本、墨、軸装

〔法量〕縦 130.0 × 横 31.1 (cm)

〔箱書〕「萬葉集防人之歌 楯彦翁書」

〔箱裏〕「この防人の歌は楯彦翁青年時代萬葉研究して好むで／唱ひし歌戦時中書き花朝女史に與へしもの也
／女史愛之一也當題の因縁を記し置く者也／茲昭和五十三戊午年孟暑之日 菅真人謹題簽」

朱文方印「菅」

〔本紙〕「けふよりはかへりみなくて／大君のしこのみたてと／いてたつわれは」

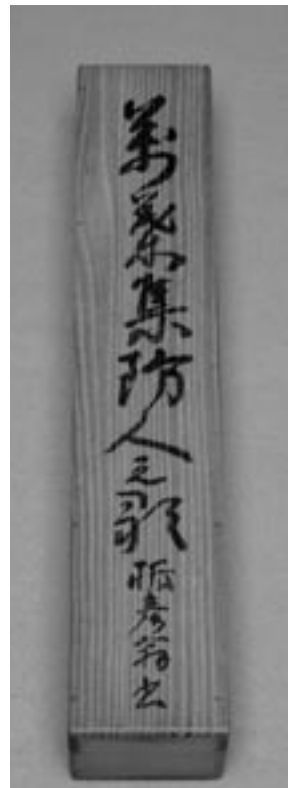
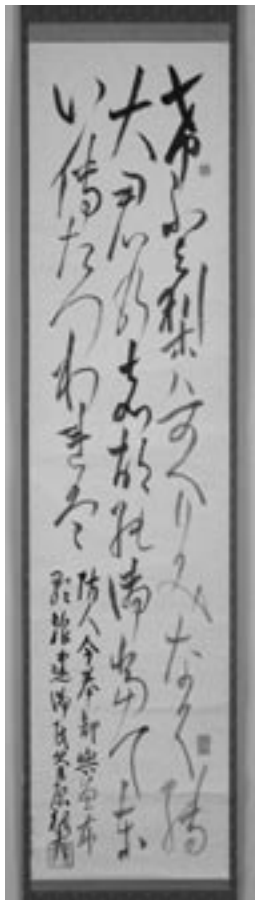
「防人今奉部与曾布／題浪速御民菅原楯彦」

朱文方印「菅原楯彦」

白文方印「大哉業矣」「筆墨盡忠」

【解説】

菅楯彦筆の万葉和歌掛幅である。『万葉集』巻二十に収録されている今奉部与曾布いままつりべのよそぶの和歌「今日よりは顧みなくて大君の醜かまがきはるおかの御楯と出で立つわれは」が、三行にわたって書かれている。楯彦は明治 35 年（1902）に、国学者の鎌垣春岡（1833～1909）から「楯彦」という号を与えられるが、その命名の由来となったのがこの和歌である。また、甥の真人いくたからうじよが書いた箱書に「花朝女史に与へしもの也」とあるように、弟子の一人である生田花朝女（1889～1978）に与えたようである。



(学芸遺産研究プロジェクトR.A. 中尾和昇)